

和辻哲郎

京の四季



# 京の四季



京都に足かけ十年住んだのち、また東京へ引越して来たのは、六月の末、樹の葉が盛んに茂っている時であったが、その東京の樹の葉の緑が実にきたなく感じられて、やり切れない気持ちがあった。本郷の大学前の通りなどは、たとい片側だけであるにしろ、大学の垣根内に大きい高い楠の樹が立ち並んでいて、なかなか立派な光景だといってよいのであるが、しかしそれさえも、緑の色調が陰鬱いんうつで、あまりいい感じがしなかった。大学の池のまわりを歩きながら、自分の目が年のせいで何か生理

的な変化を受けたのではないかと、まじめに心配したほどであった。

京都から時々上京して来たときにも、この緑の色調の相違を感じなかったわけではない。しかし三日とか五日とかの短い期間だと、それはあまり気にならず、いわゆるや苦痛とまではならなかった。それが、引越して来て居ついたとなると、毎日少しずつ積もって行って、だんだん強くなったものと見える。いわゆる acceleration の現象はこういうところにもあるのである。とうとうそれはやりきれないような気持ちにまで昂こじて行った。自分

ながら案外なことであった。京都に移り住む前には二十年ぐらいいも東京で暮らしていたのであるが、かつてそういう気持ちになったことはない。

気になり始めると、いやなのは緑の色調ばかりではなかった。秋になって、樹々の葉が色づいてくる。その黄色や褐色や紅色が、いかにも冴さえない、いやな色で、義理にも美しいとはいえない。何となく濁なっている。爽さわやかさが少しもなく、むしろ不健康を印象する色である。秋らしい澄んだ気持ちは少しも味わうことができない。あとに取り残された常緑樹の緑色は、落葉樹のそれより

は一層陰鬱で、何だか緑色という感じをさえ与えないように思われる。ことに驚いたことには、葉の落ちたあとの落葉樹の樹ぶりが、実におもしろくなかった。幹の肌がなんとなく黒ずんでいてきたない。枝ぶりがいやにぶつきら棒である。たまに雪が降ってその枝に積もっても、一向おもしろみがない。結局東京の樹木はだめじゃないか。「森の都」だなどと、嘘をつけ、と言いたくなるほどであった。

こんなふうにして不愉快な感じがいつまでも昂じて行くとするれば、閉口するのはほかならぬ私自身であって、



東京ではない。これは困ったことになったと思っていると、幸いなことに東京の春がそれを救ってくれた。樹木に対して目をふさぐような気持ちで冬を過ごしてしまうと、やがて濠<sup>ほり</sup>ばたの柳などが芽をふいてくる。いかにも美しい。やっぱり新緑は東京でも美しいんだなと思う。次々にほかの樹も芽を出して来て、それぞれに違った新緑の色調を見せる。並木に使ってある櫟<sup>けやき</sup>の新緑なども、煙ったようでなかなかいい。などと思っているうちに acceleration が止まったのである。東京の新緑が美しいといってもとうてい京都の新緑の比ではないが、しかし

美しいことは美しい。やがて新緑の色が深まるにつれ、だんだん黒ずんだ陰鬱な色調に変わって行くが、これも火山灰でできた武蔵野の地方色だから仕方がない。樹ぶりが悪いのは成長が早すぎるせいであろう。一体東京の樹木は、京都のそれに比べると、ゲテモノの感じである。ゲテモノにはゲテモノのおもしろみがある。などと、自分で自分を慰めるようになった。

が、こういう経験のおかげで、私は今さらに京都の樹木の美しさを追想するようになった。

大槻正男君の話によると、京都の風土は植物にとって非常に都合のよいものであるという。素人目にもそれはわかる。水の豊富なこと、花崗岩かこうがんの風化でできた砂まじりの土壌のことなどは、すぐ目についてくる。ところでその湿気や土壌が植物とどういうふうに関係してくるかというと、なかなか複雑で、素人には見とおしが見つからない。ただほんの一端が見えるだけである。

京都の湿気のことを考えると、私にはすぐ杉苔すぎこけの姿が浮かんでくる。京都で庭園を見て回った人々は必ず記憶していただけることと思うが、京都では杉苔やびろうど苔

が実によく育っている。ことに杉苔が目につく。あれが一面に生い育って、緑の敷物のように広がっているのは、実に美しいものである。桂離宮の玄関前とか、大徳寺真だいとくじ珠庵の方丈の庭とかは、その代表的なものと言ってよい。嵯峨さがの臨川寺りんせんじの本堂前も、二十七、八年前からそういう苔庭になっている。こういう杉苔は、四季を通じて鮮やかな緑の色調を持ち続け、いつも柔らかかそうにふくふくとしている。ことにその表面が、芝生のように刈りそろえて平面になっているのではなく、自然に生えそろって、おのずから微妙な起伏を持っているところに、何ともい

えぬ美しきがある。従つてそういう庭は、杉苔の生えるにまかせておけば自然にできあがつてくる道理である。臨川寺の庭などは、杉苔の生えている土地の土を運んで来て、それを種のようにして一面にふりまいておいただけなのである。しかしその結果として一面に杉苔が生い育ち、むらなく生えそろうということは、その場所にちようどよい条件がそろつていることを示している。杉苔は湿気地ではうまく成長しないが、乾いた土地でもだめである。その上、一定の風土的な条件がなくてはならぬ。京都はそういう条件を持つている。それが京都の湿度だ

と思う。

私は永い間東京には杉苔はないと思っていた。東京で名高い名園などでも杉苔を見なかったからである。しかし京都から移って来て数年後に東京の西北の郊外に住むようになったとみると、杉苔は東京にもさらにあることがわかった。農家の防風林で日陰になっている畑の畔くろなどにはしばしば見かける。散歩のついでにそれを取って来て庭に植えたこともあるが、それはいつのまにか消滅してしまった。杉苔を育てるのはむずかしいと承知しているから、二度とは試みなかった。ところが五、六年前、

非常に雨の多かった年に、中庭の一部に一面に杉苔が芽を出した。秋ごろには、京都の杉苔の庭と同じように、一坪くらいの地面にふくふくと生えそろった。これはしめたと思って大切に取り扱い庭一面に広がるのを楽しみにしていたのであるが、冬になって霜柱が立つようになると、消えてなくなった。翌年も少しは出たが、もう前の年のようには育たなかった。雨の少ない年には全然出て来ないこともある。昨年はいくらか出たが、今年は比較的多く、庭のところどころに半坪ぐらいつつ短いのが生えそろっている。竜りゆうの髯ひげの間にもかなり萌え出てい

るところがある。しかし冬は必ず消えるのであるから、京都の杉苔のようになる望みは全然ない。それを見て私には、東京と京都との風土の相違がかなり具体的にわかったのである。

これは杉苔だけのことであるが、しかし杉苔にこれほど顕著に現われている相違は、他のあらゆる植物にもあるに相違ない。樹の葉の色の相違などは、たぶんそこに起因するものである。東山や嵐山などを包んでいる樹木の種類は非常に多いのであるが、そういう多種類の樹木の一々が、非常に具合のいい湿気に恵まれて、その樹



木に特有な葉の色を、最も純粹に發揮しているのかもしれない。あるヨーロッパの画家が、新緑ごろの嵐山を見て、緑の色の種類のあまりに多いのに驚嘆した、という話を聞いたことがある。特に京都でそういう印象を得たということとは、京都の樹木の種類が多いことを示すとともに、また一々の樹の特徴が他の地方でよりもくつきりと出ていることを示すのであろう。椎しいの樹は武蔵野の原始林を構成していたといわれるが、しかし五月ごろの東山に黄金色に輝いている椎の新芽の豪華ごうしゃな感じを知っているものは、これこそ椎だと思わずにはいられない。

が、湿気と結びついて土壌が重要な役目をしていることも見のがすわけには行かぬ。樹木の姿の相違などはそこに起因しているように思われる。武蔵野の土は、岩石の風化でできた土とは、非常に違ったものである。いくら掘ってみても同じようにボコボコしているし、石などは一つも出て来ない。植物の根がのびて行くのを邪魔するものは何もない。たぶんその結果であろう、武蔵野の樹木はのびが非常に早い。それが樹の姿に野育ちの感じを与える。その代表的なものはつつじだと思う。一間も二間もの高さに育ったつつじなどは京都付近では見るこ

とができない。それと同じに松の樹の枝ぶりがまるで違  
うし、桜に至っては別の種類ができあがっている。楓かえで  
などでも成長の速度が恐ろしく違う。そういう相違はあ  
らゆる樹木の種類について数え上げて行くことができる  
のである。京都の東山などは、少し掘って行けば下は岩  
石である。そういう、あまり厚くない土壌の上に、相当  
に大きい樹木が生い茂っている。ああいう樹木の根は、  
まるで異なった条件の下にあると行ってよい。同じ丈を  
のばすのに、二倍三倍の年数がかかるかもしれない。し  
かしそれは無駄ではないのである。早くのびた樹の姿は、

いかにも粗製の感じで、かっちりとした印象を与えない。また実際に早く衰える場合も多い。それに対して、同じ大きさになるのに二倍三倍の年数をかけた樹は、枝ぶりに念の入った感じがあるばかりでなく、かえって耐久的なのである。そういう樹々が無数に集まって景観を形成するとすれば、景観全体がすっかり違った感じになるのは当然であろう。

私は東山の麓ふもとに住んでいた関係もあって京都の樹木の美しさを満喫することができた。

新緑のころの京都は、実際あわただしい気分させられる。疎水端そすいばたの柳が芽をふいたと思うと、やがて次から次へといろいろな樹が芽をふき始める。それが少しずつずれていて、また少しずつ色調を異にしている。樹の名は一々は知らないが、しかしとにかく種類が多い。楓が芽をふき始めるのは四月の中ごろであつたと思うが、若王子にやくおうじの池畔にある数十本の楓だけでも、芽の出る時期は三、四段に分かれており、新芽の色もはつきり四、五種類に見分けることができた。若王子神社の伊藤快彦氏の話では、ここには十何種類かの楓が集めてあるとい

うことであつた。その楓の新芽が、日々に少しずつ色を変えて葉をのばして行き、やがてほぼ同じ色調の薄緑の葉を展開し終わるのは、大体四月の末五月の初めであつたが、その時の美しさはちよつと言ひ現わし難い。実に豊かな、あふれるような感じであつた。ことにそのころがちようど陰曆の十四、五日にでも当たつており、幸い晴れた晩があると、月光の下に楓の新緑の輝く光景を見ることができた。その光と色との微妙な交錯は、全く類のないものであつた。

楓だけでもそれぐらいであるが、東山の落葉樹から見

れば楓はほんの一部分である。新緑のところ、東山の常緑樹の間に点綴てんてつされていかにも孟春もうしゆんらしい感じを醸かもし出す落葉樹は、葉の大きいもの、中ぐらいのもの、小さいものといろいろあったが、それらは皆同じように、新芽の色から若葉の色までの変遷と展開を五月の上旬までに終えるのである。そうしてそのあとに常緑樹の新芽が目立ち始める。椎とか檜かしとかの新芽である。前に言ったように椎の新芽の黄金色が、むくむくと盛り上がったような形で東山の山腹のあちこちに目立ってくるのは、ちようどこのころである。やがてその新芽がだんだん延びて、

常磐樹ときわぎときわぎらしく落ちついた、光沢のある新緑の葉を展開し終えるころには、落葉樹の若葉は深い緑色に落ちついて、もう色の動きを見せなくなる。そうなるともうすぐに五月雨さみだれの季節である。栗の花や椎の花が黄金色に輝いて人目をひくのはそのころである。

松のみどりがだんだん目につくようになってくるのも、そのころからであったと思う。新芽の先についた花から黄色の花粉のこぼれるのが見えたと思ううちに、やがて新芽の新しい針葉がのびて来て、古い葉と層々相重になった、いかにも松の新緑らしい形になる。なるほど土



佐絵の画家はこれを捕えたのであつたかと気づかざるを得ないような形である。東京で松の新緑を見ても、必ずしもそういう印象を受けるとは限らないのであるが、東山などでは、最も数の多い松の樹が、そろってそういう形になるのである。落葉樹の緑色も、常磐樹の緑色も、もうすっかり落ちついて、新緑らしい鮮やかさのなくなったころであるから、この松の新緑は、非常に鮮やかな美しい印象を与える。

松の新緑が出そろつてしまふのは、もう土用も遠くない七月の初めであつたと思う。やがて一、二週間もする

と、この新緑も落ちついた色に変わってしまう。柳の芽が出始めて以来、三、四ヶ月の間絶えず次から次へと動いていた東山の緑色が、ここで一時静止する。それはちやうど祇園祭りのころで、昔は京都の市民が祭りの一週間とその前後とで半月以上にわたって経済的活動を停止した時期である。

しかしこの静止状態が続くのは、せいぜい三週間であって、一ヶ月にはならなかったと思う。土用の末ごろにはもう東山の中腹の落葉樹の塊りが、心持ち色調を変えてくる。ほんの少しではあるが、緑の色が薄くなるので

ある。ここで動きがまた始まる。八月から九月の中ごろ、秋の彼岸のころへかけては、非常に徐々としてではあるが、だんだん色が明るくなって行き、彼岸が過ぎたころには、緑の色調全体がいかにも秋らしい感じになる。

少しずつ黄色が目立ちはじめるのは、十月になってからであつたと思う。新緑の時に樹の種類によつて遅速があり、またその新芽の色を著しく異にしていたように、緑があせて黄色が勝ち始める時期も、またその黄色の色調も、樹によつてそれぞれ違ふ。十月の中ごろにはそういう相違がはっきりと感じられるようになる。櫛ならであつ

たか、形のいい大きい葉で、実に純粹な美しい黄色を見せるのもあった。それから櫺はぜのような真紅な色になる葉との間に、実にさまざまな段階、さまざまな種類がある。それが大きい樹にも見られれば、下草の小さい木にも見られる。

私が初めて東山の若王子神社の裏に住み込んだのは、九月の上旬であったが、一月あまりたつてようやく落ちついて来たところに、右のような色の動きが周囲で始まった。書斎の窓をあけると、驚くような美しい黄葉が目に見え、飛び込んで来る。一步家の外に出ると、これまで注意し

なかつたいろいろな樹が、美しく紅葉しかけています。それが毎日のように変わって行く。十月の下旬になると、周囲がいかにも華やかな、刺戟しげきの多い気分になって、書斎の中に静かに落ちついていることができなくなりました。これは飛んだところへ引越して来た、と幾分あわてるような気持ちにさえなりました。

そういう紅葉の代表的なのは楓の紅葉で、その楓の樹は家の前の池のまわりに数十本植えてあった。その楓の種類が多く、新芽の出る時期や新芽の色が日々違っていることは、前にちよつと述べたが、紅葉の時にまたその

相違が現われてくる。真紅になるのもあれば、紅の要素が非常に少なく、ほとんど黄色に近いのもある。芽の色に赤味が勝っていた樹は、紅葉の時の赤みも濃い、というような関係も目立ったが、また芽の出の最も遅かった樹がまっ先に紅葉するというような、逆の関係も目についた。年によると、この相違が非常に強く現われ、早い樹はもう紅葉が済んで散りかけているのに、遅い樹はまだ半ば緑葉のままに残っている、というようなこともあった。そういう年は紅葉の色も何となく映はえない。しかし気候の具合で、三年に一度ぐらいは、遅速があまりな

く、一時に全部の樹の紅葉がそろそろのこともあった。それは大体十一月三日の前後で、四、五日の間、その盛観が続いた。特に、夕日が西に傾いて、その赤い光線が樹々の紅葉を照らす時の美しさは、豪華というか、華嚴けごんというか、実に大したものだと思った。しかしその年の紅葉がそういうふうに出来がよいということの見透しは、その間ぎわまでにはつかないのである。手紙で打ち合わせをして東京から客を呼ぶ、というだけの余裕はなかった。老人は、夏が早魃かんばつであればその秋の紅葉は出来がよい、と言ったが、それは必ずしも当たらなかつた。たぶん、

気候の条件がそろっている上に、その年の霜しもの降り具合が仕上げをするのであろうと思う。いずれにしても、高山とか高原とかでなくては見られないような美しい紅葉が、大都会の中で見られるのである。

紅葉は大体十一月一杯には散ってしまふ。楓の樹が数十本もあると、その下に一、二寸に積もっているもみじの落葉を掃除するのはなかなかの骨折りであつた。もみじの落葉を焚たいて酒を暖めるとというのが昔からの風流であるが、この落葉で風呂わを沸かしたらどんなものであるかと思つて、大きい背しよ負よい籠かごに何杯も何杯も運んで行つ



て燃したことがある。長州風呂でかまどは大きかったのであるが、しかしもみじの葉をつめ込んで火をつけると、大変な煙で、爆発するようにたき口へ出て来た。そのわりに火力は強くなかった。山のように積み上げたもみじの葉を根気よくたき口から突き込んで、長い時間をかけて、やっとはいれる程度に湯がわいた。湯はもちろん薪で焚いたのと一向変わりはなかったが、しかしこの努力でできた灰は大したものであった。さらさらとしていて、何となく清浄な感じで、灰としてはまず第一等のものがある。

紅葉のなくなつたあとの十二月から、新芽の出始める三月末までの間が、京都を取り巻く山々の静止する時期である。新緑から紅葉まで絶えず色の動きを見てみると、この静止が何とも言えず安らかで気持ちがいい。緑葉としては主として松の樹、あとは椎や檜のような常緑樹であるが、それらの落ちついた緑がなかなかいい。落葉樹の白っぽい、骨のような幹や枝が、この常緑と非常によく釣り合っている。色彩という点から言つても、この枯淡な色の釣り合いが最もよいかもしれない。

これは私には非常な驚きであつた。東京では冬の間樹

木の姿が目に入らなかつたのである。まれに目に入ると、それはむしろいやな感じを与える。早く春になって新芽が出るとよいと思う。しかるに京都では、この落ちついた冬の樹木の姿が、一番味がある。われわれの祖先の持っていた趣味をいろいろと思い出させる。

中でも圧巻だと思つたのは、雪の景色であつた。朝、戸をあけて見ると、ふわふわとした雪が一、二寸積もつて、全山をおおうている。数多い松の樹は、ちようど土佐派の絵にあるように、一々の枝の上に雪を載せ、雪の下から緑をのぞかせる。楓の葉のない枝には、細い小枝

に至るまで、一寸ぐらいつ雪が積もつて、まるで雪の花が咲いているようである。その他、ひのき檜とか杉とか椎とか檜とか、一々雪の載せ方が違うし、また落葉樹も樹によって枝ぶりが違い、従つて雪の花の咲かせ方も趣を異にしている。それを見て初めて私は、昔の画家が好んで雪を描いたゆえんを、なるほどと肯うなずくことができたのである。四季の風景のうちで、最も美しいのはこの雪景色であるかもしれぬ。

しかしこの美しさは、せいぜい午前十時ごろまでしか持たない。小枝の上にたまつた雪などは非常に崩れやす

く、ちよつとした風や、少しの間の日光で、すぐだめになつてしまふ。枝の上の雪が崩れ始めれば、もう雪景色はおしまいである。だから市中に住んでいる人にこの景色を見せたいと思つても、見せるわけには行かなかつた。

こういう雪景色と交錯して、二月の初め、立春の日の少し前あたりから、池の鯉が動きはじめ、小鳥がしきりに庭先へ来る。そういう季節が、紅葉と新緑とから最も距<sup>へだ</sup>たつていて、そうして最も落ちついた、地味な美しさのある時である。昔の人はちようどそのころに年の始めを祝つたのであつた。

(昭和二十五年九月)



日本文学電子図書館

---

「和辻哲郎随筆集」

著 者：和辻哲郎

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

1995年9月18日 第1刷発行

---

日本文学電子図書館